

2016年度修士論文要旨

松下 泰之

ヘルダーの作品における感覚論の展開と その評価の変遷について

この論文はヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744-1803）によるイマヌエル・カント（Immanuel Kant, 1724-1804）への批判について、その批判を回避と補遺による発想のもと考察していくことを目標とする。カール・バルトは、単にカントの考えを拒絶し批判を行ったのではなく、カントの学問概念と道徳概念を、その厳格さにおいて多かれ少なかれ理解して存続させ適用させるというカント回避について述べ、その点でヘルダーをカント回避の巨匠と呼んだ。つまり、あくまでヘルダーは自身が深く影響を受けた批判前期のカント哲学に敬意を払いつつ、『純粹理性批判』でカントの提唱した概念図式を崩すことなく、そこに補遺を行うことでカント思想の内で自身の思想を活そうとしていたとも考えうる。『メタ批判』における感覚論および認識論や、その基礎となる存在論は、早熟の天才とされたヘルダーが若き日に師であるカントから直接授けられた教えを彼なりに理解し、咀嚼した結果、生まれた思想の一部であり、『メタ批判』はそれ以後も、度々批判を受けようとも変わらず尊敬の念を持ち続けたカントの哲学に、前批判期のカントの思想を含め、彼がその生涯で吸収してきたハーマン、ライプニッツ、ヴォルフといった哲学者の思想を参考に組み上げた、ヘルダー晩年における思想の集大成とも言える。1799年にヘルダーにより執筆された『純粹理性批判のメタ批判（Metakritik der Kritik der reinen Vernunft）』は、1803年に亡くなった彼の晩年の作品であり、度々論争を交えながらも、その教えを生涯変わらず尊重しつづけた師であるイマヌエル・カントの『純粹理性批判』に対する批判書である。ヘルダーは、

カントによる理性批判哲学が持て囃される当時の哲学会の風潮に関して危機感を感じ、その風潮を打破しようと取り組んでいた。ごく一部の例外を除いた当時の哲学者は、『メタ批判』の否定に回った。果たして、ヘルダーは自身の想像通り、人々からの軽蔑を受け、ごく一部の例外を除いて『メタ批判』はあらゆる場面で無理解と忌避にさらされることとなった。以降も、現代的なヘルダー研究はこの背後にあるヘルダーの個人的な動機を、カント、ゲーテ、シラーといった面々からの度重なる批判によって与えられた数多くの失望と傷ついた自尊心からの発奮という理由であったとしてきた。これらの研究は、『メタ批判』についての当時の評価をそのまま受け継いで、『純粹理性批判』についてのヘルダーの理解不足のみが批判の原因としてきた。『メタ批判』におけるヘルダーは非常に強い口調で論駁を行っているが、カントの認識論の構造に限定して見れば、超越論的と先験的に分化された理性構造を否定しているものの、その外観は内在的主観による客観の観察を通した合理論的認識論には違いなく、つまりカント的外観を残したカント回避を行ったと認めうる。